
きみに会えて

嶺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きみに会えて

【Nコード】

N3334H

【作者名】

嶺羅

【あらすじ】

「僕はあなたと出会えて良かったです。」コナンが新一に戻った後の話。新一の誕生日会で光彦は――。 ※光彦の一人称です。前後編型。

前編

きみに会えてよかったね

この広い地球の中で

めぐり会ったこの喜びを

大切にしたい

君と過ごした日々は忘れることができなくて。

いつだって悔やんで

いつだって追いつきたくて

いつだってライバル視をしてて

だけど自分には程遠いことは分かった。

そんな君だったから、別れを惜しむことができた。

尊敬する事ができた。

信頼する事ができた。

何よりも、『出会えてよかった』と心から思うことができた。

あの日、君に初めて会った時

正直言うと、僕は君を見下していた。

背は僕の方が高いし、

頭だって自分で言っちゃう程良い方だと思ってたし、

転校してきた君より、長くこの帝丹小に通ってるからと、
何でも知ってる気になっていた。

だけどそれは僕の思い過ごしに違いない事を、君に思い知らされた。

“ 上には上がいる ”

いつか姉さんが僕に話した言葉だった。

その言葉通り、僕の上には君がいた。

今考えてみると僕は、

君より背は高いけど、顔は平均だし、

君より積極的に授業に参加して、良い点を取ろうと努力をしたけど、大抵は85点止まり。

そして僕は君よりも長く帝丹小に通っているから、それなりの事は分かっていたつもりだった。

でも君は僕よりも、

背は低いものの、僕なんか比べものにならない程顔立ちが良くて、おまけに女の子達の憧れの的だったし、

僕より授業に参加せず、寝るか外を眺めているかだったのに、テストは何故かいつも満点。

そして帝丹小の事は、逆に君に教えられることが多かった。

そんな君が、凄く輝いていて、

かっこ良くて、

いつか君を“ライバル”ではなく、

“憧れ”として見るようになっていた。

「光彦ー、置いてくぞー？」

「あつ、待って下さいよ！」

「早く早く！」

「はあはあ、さ、さあ行きましょう。」

今日はコナンくん…の誕生日。

今年で18歳を迎えるそう。

え？どうして18歳かって？

それは、コナン君は『工藤新一』に戻ったから。ただ僕には、新一お兄さん〓コナンくんだから、つい、新一お兄さんをコナンくんと呼んでしまう。

今までもそんなことは多々あった。

でもぼくは、複雑ながらも『コナンくん』と呼ぶ。

自分の中では。

今日はこれから、コナンくんの誕生日会がある。

その為僕ら少年探偵団は、誕生日会の買い出しへと向かっている。

僕は靴を履くのが遅れて、元太ちゃんと歩美ちゃんにせかされながらも、

急いで靴を履き、二人の元へと走った。

僕らの担当は、『飾り系』。

ケーキの飾りや、部屋の飾り等を担当していた。

そして今は、飾り売場で選り中であつた。

そんな中、歩美ちゃんが声を張り上げて、僕の元へとやってきた。

「わぁ、見てみて光彦君！これなんかいいと思うよ！」

そういつて歩美ちゃんが差し出してきたのは、

ケーキにのせるチョコプレートだった。

一般のプレートより少し大きめだが、普通と変わらない、チョコプレートだった。

「歩美ちゃん、そのプレートがどうかしたんですか？」

「このプレートに、何か書こうよ！」

「確かに普通により大きいし…いいですね。でも、何を書きますか？」

「うーん…まずは『新一お兄さん』って名前でしょ？あとは…」

あッそうだ！新一お兄さん、探偵でしょ？それに彼女らんさんがいるから、ハートと、英語で探偵って書くのはどう？日本語で書くよりかっこいいと思うし！

英語は博士に聞いてさ！」

「そうですね、やりましょう！愛情がこもってていいですしね！」

「うん！じゃあこれは買おう。あ、チョコペンも買わないと文字が書けないや。」

歩美ちゃんはチョコプレートが売っていた場所から

チョコペンを持って走って来て、カゴに入れた。

「あとは…あ、元太くん。何かいい飾り、見つかりましたか？」

「おう！コナンが喜びそうなものばっかだぜ！見てみろよ！」

「わあ、ほんとだ！コナンくん、絶対喜ぶね！」

この時僕は気づいてしまった。

みんな、我慢しているんだと。

我慢しているのは、僕だけじゃないって事を。

普段僕は、みんなの前で「コナンくん」と言いたいところを我慢して

「新一お兄さん」と呼んでいる。

みんなも「新一お兄さん」と呼んでいるから気付かなかったのかも
しれない。

だけど今、気づいてしまった。

今はみんな、飾りを選ぶのに夢中で、

自分が「コナンくん」と呼んでいることに気がついていないんだ。

本当はみんな、僕と同じで『コナンくんに戻って来てほしい』と
思っているのかもしれない。

「ふう、やっと買い物終わったね。」

「俺もう腹減ったぜ。」

「僕もです。早く博士の家に帰りましょう。」

「そうだね。早く帰ろう。」

そうして僕らは博士の家へ帰る事になった。

前編（後書き）

こんにちは、嶺羅です。

今回は光彦が主人公です（^▽^ω^）↑怖いW
実はこの題名は、私自身の思い出があります。
ヒントは、そうですね…

『別れ』ですかね^^

皆さん推理してみてくださいWW

それでは後編で会いましょうo(≡▽≡)o

後編

「光彦君、そこにあるお皿持って来てくれる？」

「あ、はい！わかりました！」

蘭さんに頼まれた皿を運ぶと、僕は元太くんが飾り付けをしてる所へ手伝いに行った。

「ここはこうだよー元太くん。」

「お、おう。あっ…！！」

がっしゃーん！！

「もう、何やってるのよ…。」

ばらばらに落ちた飾りを見て灰原さんが呆れた顔をしてやって来た。

僕は落ちた飾りの一部でもある鈴を拾いあげた。

「灰原さん、鈴ってどうしてこう鳴らすと、遠くまで響くんでしょう。」

「僕たちには出来ないことですよね…なんだか羨ましいです。」

「……あなたは何が出来る？」

「え…。」

「あなたが出来ることはなに？鈴は鳴る。あなたは言葉が話せる。鈴は鳴ることが当たり前なの。鳴ることで事を伝える。」

「だからあなたも同じ事してるんだから、羨ましがる事なんかないんじゃない？」

「…そうですね！ありがとうございます！」

「役に立ったならそれでいいわ。」

「光彦くん、哀ちゃん、喋ってないで手伝ってよお。」

「あ、はい。」

僕は飾りを拾い集めると、会場となるその場所を、装飾し始めた。

| 17 .. 15 |

事件が片付いたコナンくんが博士の家へとやって来た。

勿論呼んだのは蘭さん。

案の定、コナンくんは自分が誕生日だという事に気づいていないようだった。

ピンポーン♪

インターホンが鳴る。

ガチャ……

パァン

「「誕生日オメデトウ!!!!!!!!!!!!!!」」

「……へ？」

「やっぱり新一、忘れてたんだ。」

「あ、ああ……今日は俺の誕生日か。」

定番の歌を歌った後、蘭さんがさっき作ったケーキを切り分けた。

コナンくんはみんなにプレゼントを貰ったり、祝福されたりしていて、少し照れながらも誕生日会を大いに楽しんでいるようだった。

そんなコナンくんが、なんだか羨ましく思えた。
と同時に、みんなコナンくんを慕っているんだなあとしみじみ思った。

コナンくんの誕生日が始まって早くも3時間が経とうとしていた。
集まったメンバーにも何人か解散する人が出てきた。

みんなが思い思いな事を始めた頃

僕は一人ジュースを飲みながらテレビを見ているコナンくんに話しかけた。

「あ、あの…コ…新一お兄さん、ちょっと話したいことがあるんですが…いいですか？」

「あ、おう。いいよ。」

僕たちはベランダに出て話す事になった。

夜のためか少し肌寒い風が眠りかけた僕の目を覚まさせた。

「…光彦。」

「あ、はい！」

「お前、さっきオレの事『コナン』って言いかけたろ？」

「あっはい、すいません…。」

僕は恥ずかしくなって顔を俯いた。

「ハハッ、いや、別にいいんだ。」

「…ただ、まだみんな慣れてねえんだなーと思ってよ。」

「…どう言うことですか？」

「さっき歩美や元太にプレゼントを貰った時も、さっきのオメーみてえな言葉になってたからよ。」

蘭も蘭で、『新一がまだコナンくんのような気がして歯がゆい』なんて言うしよ…。」

「そうなんですか…。」

「それで、光彦の話って何なんだ？」

「あ、はい…。…：僕、一度は言っておくべきだと思って…。」

そこで僕の言葉は途絶えた。
しばらく二人の間には沈黙が続く。

「僕、最初初めてあなたと会ったとき、正直言うで見下していたんです。

だけど、あなたと少年探偵団として過ごしているうちに、いつしか憧れになったんです。

：僕はあなたと出会えたことで変わった気がします。

元太くんや歩美ちゃんという時間も、前よりもっと楽しめるようになりまして。

すべてあなたと出会ったからです。僕はあなたと出会えて良かった

って思ってます。

…ただ、それだけです。」

「…ありがとな、光彦。オメーがそんな風に思ってたてくれてたなんて気づかなかったぜ。」

…オレもオメーを尊敬してたぜ。」

「え?!」

「マジだぜ? いざというときは元太よりリーダーシップが良かったしな。」

「あはは…。」

「…オレも、オメーらと出会えて良かった。」

「…僕もです。」

「…光彦。」

「はい？」

「これからも、遊びに来いよ。みんなも連れてさ。」

「いいんですか？」

「ああ、勿論！」

「よし、じゃあ早速明日コナン家行こうぜ！」

「元太くん?!」

「歩美も行きたあーい！」

「抜けがけなんてずりーぞ光彦！俺らもコナンと話したかったぞ！」

「あたしも！コナンくん、明日歩美とイッパイ話そうね！」

「あの、オレ新一なんだけど……。」「

「どっちでもいいじゃない！コナンくんも新一お兄さんなんだから！」

「そうだぞー！」

「…まあ、いっか。」

「わーい♪」

「ぼ、僕もつとコナンくんと話したかったんですが……まあいっか。」

今夜の月は、少し欠けていたが、とても美しい月だった。

それはまるで、僕から見たコナンくんのように……

後編（後書き）

こんばんは（●^▽^●）

後編はどうでしたか？前編より少し長かったような気がします。
では、ここで回答w

私自身の思い出とは、

私の卒業式で、全校生で合唱した歌の題名と、

この小説の題名が同じなのです。

それと、前編の出だしが、歌詞になっていますo（≧▽≦）o
評価・感想など頂けたら嬉しいです。

それでは☆

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3334h/>

きみに会えて

2010年10月9日03時40分発行